

マダニにご用心

◆マダニが媒介する感染症に注意

春から秋にかけてマダニの活動が盛んになる時期です。行楽や農作業などで野山や草むら、畑などに入るとマダニに咬まれることがあります。マダニが病原体を保有している、咬まれた人が「重症熱性血小板減少症候群(SFTS)」や「日本紅斑熱」などの感染症にかかる危険性があります。発症すると重症化することも多く、有効な治療法やワクチンもないため、マダニに咬まれないよう予防対策をとりましょう。

◆マダニについて

マダニは、春から秋にかけて活動が活発になる、森林や草地などの屋外に生息する比較的大型のダニです。食品などに発生するコナダニや衣類や寝具に発生するヒョウダニなど、住宅内で生息するダニとは種類が異なります。

マダニの体長は、成虫のダニでは吸血前で3から8mm、吸血して満腹になると膨らんで10から20mm

にもなります。

1回の吸血期間は、数日から長いものは10日間以上。満腹になると自分から離れますが、それまではなかなか離れません。主に森林や草地など、野生動物が出没する環境に多く生息していますが、民家の裏山や裏庭、畑、あぜ道などにも生息しています。

◆マダニが媒介する感染症

日本紅斑熱やライム病、回帰熱、ダニ媒介性脳炎などがあります。また、2012年以降、重症熱性血小板減少症候群(SFTS)の患者が、西日本を中心に毎年数十人発生し、死亡例も報告されています。

- 「重症熱性血小板減少症候群」(SFTS)とは

SFTSウイルスを保有しているマダニに咬まれることによって感染します。6日から2週間程度の潜伏期間を経て、発熱、消化器症状(食欲低下、おう吐、下痢、腹痛など)が現れ、時には頭痛や筋肉痛、神経症状なども起こります。

- 「日本紅斑熱」とは

日本紅斑熱リケッチアという病原体を保有するマダニに咬まれることで感染します。2日から8日

程度の潜伏期間を経て、発熱、発疹、頭痛、倦怠感などが出現します。マダニが刺した部位に「刺し口」と呼ばれるカサブタのようなものが見られることが多く、放っておくと重症化するので、早い段階で適切に治療することが大切です。

◆予防について

マダニに咬まれないようにすることが大切です。草むらやヤブなど、マダニが生息する場所に入るときには、次のポイントに気をつけましょう。

- 帽子や手袋の着用、首にタオルなどを巻くなど肌の露出を少なくする
- 長袖・長ズボン・登山用スパッツなどを着用し、シャツのすそはズボンの中に、ズボンのすそは靴下や長靴の中に入れる
- サンドルなどは避け、足を完全に覆う靴を履く
- 服の素材は、マダニが比較的付きにくい化学繊維(ナイロン製など)のものを選ぶ
- マダニが付いたときに見つけやすい明るい色の服を着る

※ディートやイカリジンという成分を含む虫よけ剤もマダニに有

効とされていますが、過信せず補助的な使用にしましょう。帰宅したら、衣服などをよくはらってから家の中に入り、シャワーや入浴をして、マダニが付いていないか確認しましょう。特に、わきの下、足の付け根、手首、ひざの裏、胸の下、頭部(髪の毛の中)などがポイントです。

◆マダニに咬まれたときは

マダニは、皮膚にしっかりと口器を突き刺して固定しているので、無理に引き抜こうとするとマダニの一部が皮膚内に残り、炎症を起こすことがあります。できるだけ医療機関で処置をしてもらってください。

また、マダニに咬まれたら、数週間程度は体調の変化に注意し、発熱などの症状が認められた場合は医師の診察を受けてください。

- 国立感染症研究所

「マダニ対策、今できること」

○お問い合わせ

本庁 健康福祉課 保健衛生係

☎ 43-2836

佐賀支所 地域住民課 保健センター

☎ 55-7373

